シリーズ先生（八）

教師生活五十年を終えて

三ツ井　富士夫

今年（二〇一八年）の二月で専門学校の非常勤講師を辞することになり、半世紀にわたる教師生活を終えることになりました。私には「シリーズ　先生」を執筆された諸氏のように、これと言った大事を為したわけでもなく、ひたすら地道に教師を続けただけという思いがあります。教師の中には、私のようにひたすら生徒（子ども）と向き合いながら地道に、悩みながら時にはつまずきながら教師生活をしている、あるいは、していた人も少なくないように思います。そんな私の半世紀の一部を紹介するのも悪くないのかなと思い、執筆を引き受けることにしました。

私は生まれも育ちも北海道で、大学卒業時に何の縁もない新潟県の高校教員採用試験を受験してしまって、採用通知を頂き来てしまいました。十日町高校定時制千手分校を皮切りに高校教員を三十八年、退職後高校の非常勤講師を七年、専門学校の講師を十二年、また、現職の時から新潟大学教育学部の現地教員指導の講師を十二年間勤めました。高校の定時制、通信制、全日制、そして専門学校、大学といろんな場を経験させて頂きました。

さて、このシリーズのテーマである「人生のなかで、あなたの考え方や生き方に影響を与えてくれた先生」ということでは、「この人に」と思える人がいるような、いないようなという思いです。というより、新潟に来て実に多くの人たちに影響を受けながら教師として成長してきたように思います。

まず、最初に紹介したいのは、新潟高校通信制でのこ

とです。私が担任したクラスに難病を抱えたS君が入学してきました。小中学校とも今日の特別支援学校で学びながら難病と闘っていた生徒です。本人はあと何年も生きられないことを承知しながら通信制で学びたいと、最後の命を燃やしました。担当医師もそれが生きる力になればと賛成してくれたとのこと(後の両親の話)。

教科のレポートやスクーリングにと、学校の宿泊施設での他の生徒たちとの交流など、真剣に明るく取り組んでいました。その時の姿はとても難病を抱えているとは思えない程でした。しかし、入学した翌年の二月、一年足らずで彼はこの世を去りました。両親は、悲しみの中にも「この一年、Sは本当に生き生きとしていました」と語ってくれました。

このことから人間の「学び」への欲求は、決して競争や他の人との比較などで生まれるものでないことを学びました。十日町高校定時制の生徒たちのひたむきな学習姿勢とも重なり、教師になり立ての私には貴重な教えとなりました。

通信制から新潟江南高に転勤して数年後、縁あって高校学習会という学習サークルの事務局を担当することになり、その活動参加を通じて多くのことを学びました。今は亡き三条高校の藤井泰一先生（若くしてくも膜下出血でなくなりました）の学級通信を通した取り組みに感動し、私もまねて始めたのが私の学級通信のはじまりでした。

また、三条の定時制で活躍された首藤隆司先生の生徒への思いやりの深い実践に感銘し、生徒を深く見つめていくことの大切さを学びました。首藤先生の「六十近い年寄りに十六、七の若い子が街中で声をかけ話相手になってくれるのは先生だけですよ」という言葉をいつも思い出します。また、小島寿夫先生の旧黒崎高校での学年団の取り組みなどに感動し、新津南高校では、それに学びながら学年集団づくり、クラスづくりに取り組みました。小島先生のようにはいきませんでしたが、少しはそれまでと違うものを作り出せたのではと思います。

高校学習会の全県学習会で私教連にお願いして、新潟産業大学付属高校の先生に講演をして頂きました。学校ぐるみの家庭訪問運動を含めた学校づくりの取り組みです。当時、こんなすばらしい取り組みのできる

学校が新潟にもあるのだと驚きました。そのことに学び、私も夏休みを使いクラス全員の家庭訪問に取り組みました。二回の取り組みで、普通科と商業科の生徒の学習環境の違いが分かり、保護者との繋がりの大切さを身を持って体験でき、転勤した次の学校でも取り組みました。それまでは問題行動を起こした生徒の所しか家庭訪問はしていませんでした。また、この家庭訪問には県が家庭訪問費として、旅費（交通費）を支給していることを知り、大いに活用させて頂きました。

教科指導では、新潟江南高校看護科（現在は閉科してありません）の物理授業での「医療機械、器具などのしくみ」を調べる課題学習の取り組みが心に残っています。詳しくは省きますが、生徒の状況に合った指導の重要性を実感した経験でした。私の指導教科は物理が専門教科ということもあり、「難しい教科」という先入観が大きく、それをどう乗り越えていくかが課題でした。

大学の先生と高校の先生との物理学習サークルに参加したり、官制研修といわれる高教研や全国研究会にも参加し、また、組合教研にも積極的に参加し、授業づくりのあり方を探り続けました。そんな中で、生徒の状況に合った、生徒が少しでも学ぶ意欲をもてるものに、そして学習を通じてものの見方、考え方が少しでも身につくよう努力したつもりです。

授業やその他の指導で常に心がけていたのは、次の三つのことです。

一つは何よりも生徒の利益第一に考えたこと。個々の生徒の状況を考えたものであること。

一つはその時できる最良の授業、あるいは指導であること。昨年よりは今年の方が常にベターになるようにすること。

一つには、失敗しても後悔しない、その時自分でできる精一杯の努力をしたといえるように、ということです。

また、大学で教員免許収得のために受講した教育心理学で、担当の教官が「授業やクラス担任でその先生の影響でその教科が好きになった、共感したという生徒が五十人中（当時は五十人学級でした）一人でも出てくれば教師として立派です」という言葉も時々思い出します。教師の力を過信したり、傲慢になってはいけないということですが、ややもすると、教師は自分

の指導を理解しない、ついてこない生徒はダメな生徒と思いがちなことを現場で嫌という程見てそのことを実感しました。

最後に、本田敏彦先生（当時当研究所の編集長）には二十数年間にわたりお世話になりました。教育関係、社会のあり様に関わる多くの文献を勉強しましたが、本田先生からは何度となく一緒に内容を検討し勉強させてもらいました。そして先生から常に「教育とは」「教師はどうあるべきか」「学校のあり方」を問われ続け、考えさせられました。

生まれ育ち、小、中、高、大学と学んで北海道で培われたものが原点となり、数え切れない程の教え子や先生方、保護者、あるいは多くの人たちとの触れ合いの中で学ばされながら今日に至ったと感謝しています。

教師生活を振り返って唯一自信を持って誇れるのは最後の専門学校を含めて授業が苦痛で止めたいと思ったことがないことです。

今、教育界は混乱と混迷、危機が渦巻いています。再び教え子を戦場に送ることのない社会、政治を切に望みます。

（みついふじお・元新潟工科専門学校講師）

オドール・クルレンツィスの悲愴交響曲のCDを聴いて（1）

こんな演奏があったのを知らなかった。冒頭の出だしから涙が出そうな雰囲気になる。

ムジカエテルナというオーケストラも知らなかった。ユーチューブで調べたら、皆さん立って演奏しているではないか。

クラシックファンにとって来年の来日公演が待ち遠しい。

ちょうど車の中でNHKFMのクラシックカフェを聴いていたら、チャイコフスキーの6番をやっていて、この演奏はクルレンツィスの指揮ではないかと家に帰って調べたら、まさに彼の演奏であった。指揮棒を持たず、全身を揺り動かしながら指揮をしているのではないだろうか。

私もいろいろな指揮者の演奏を聴いてきた。ムラビンスキーのレニングラード交響楽団、カラヤンのベルリンフィル、バーンスタインのニューヨークフィル、新潟にきたソ連やロシアの交響楽団、しかし今まで聴いたなかでこの演奏が一番刺激を受けたのは間違いない。

音楽というのは、響きだとこのごろ思う。作曲する人がどのように伝えたい響きをつくろうとしているのか。ジャンルは問わない。クラシックであろうとなかろうと。

（伊藤）